

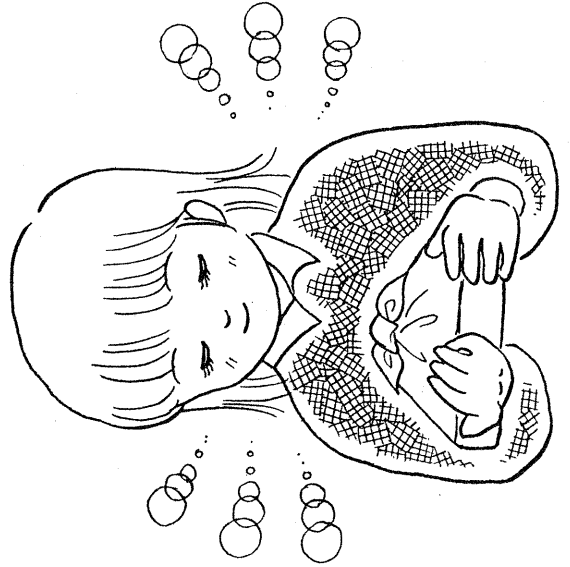
ふるしき

夏のある日、わたしは、すてきなものを発見しました。

お母さんにたのまれて、タンスをあけたときのことでした。小さなタオルやハンカチの下に、とてもきれいな布がありました。そと取り出し広げてみると、一面にさくらの花がえがかれていて、まるで花びらがまっているようでした。

わたしは、はじめスカーフなのかなと思いましたが、おかあさんにたずねてみると、「これは、ふるしきですよ。」と、教えてくれました。

ふるしきというと、お祝いの品物お祝いを包んだ赤むらさき色をしたものだと思つて



いました。それに、ふるしきに物を包んで持っている人を、めつたに見たことがなかったので、わかりませんでした。お母さんは、「このふるしきは、日本に昔から伝わる友禅ゆうぜんぞめというそめ方でそめてあるのよ。」

と、そのふるしきのことを教えてくれました。

わたしは、そばにあった本を二・三冊めいしつ包んでみました。布地がやわらかいので、本の形をそのままにうまく包むことができました。そして、下からそと手をそえてかかえてみました。

「お母さん、ふるしきで包むと、中の物が、とても大事な物のような気がするの。ふしぎね。」

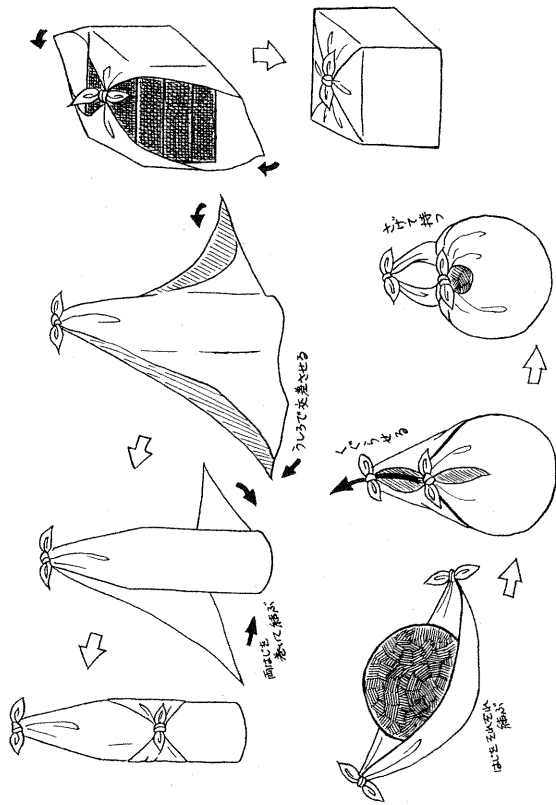
お母さんは、にににわらつて、

「ゆう子、ふるしきを持って、ちよつと台所に来てごらん。」

と、言いながら、いろいろな物をつくえの上に出しました。

お母さんの実演会じゆえんかいが始まりました。

最初に、重箱じゆうばうを包んで見せてくれました。重箱のふたは開かず、



しつかりと包まれています。

次に、大きなびんを包んで見せてくれました。

「びんの形のまま包むことができ、とても持ちやすいわ。」

その次は、すいかです。

「わあ！ すごい！」

おもわず、声をあげてしまいました。

大きくてまん丸いすいかが、なんとすっぽりと包まれているのです。

「ふろしきの角と角を結ぶと、ほら、二人で持つこともできるでしょ。」

と言って、一方のはしをわたしに持たせてくれました。かるがると持ち上がります。

わたしは、一まいのふろしきがこ

んなにいろいろと使えることを知りませんでした。

ふろしきは、物の形により包み方を変えれば、どんな形の物でも包んでしまうのです。小さく折りたたんでしまうこともでき、かたやひざにかけたりすることもできます。

わたしは、一まいのふろしきがまほうの布のように思えてしかたがありませんでした。そのとき、お母さんが、

「ふろしきは昔、おふろやさんに行くときに、着ていたものを包んだり、着物を着るときにゆかにしいたりしたから、ふろしきと呼ばれるようになったの。もともと便利に使っていたのよ。」

と、教えてくれました。

こんなすてきなふろしきを、わたしも使ってみたくくなりました。さつそく、友だちにもふろしきのよさを教えてあげて、もつといろいろな使い方ができないかを、みんなで話しあってみようと思います。

(村岡 節子)